

太宰治と四字熟語

*近藤 周吾

つまり「いかに語るか」という問いは、中期以降の太宰流に言えば読者に見える必要がない。むしろその問いが透けて見えることは、実際に作品がそれに答えようとしていることを意味するのではなく、それが書き方にこだわった作品であることを読者に示すための、偽善的な書かれ方になっていることを意味する。太宰治の中期以降の作品から、初期のような「いかに語るか」という問いが明らかになかたで見えなくなったのは、よく言われるように精神状態が安定し、かつてあったコミュニケーションに対する過剰な欲望が消えてしまったからではない。おそらくその欲望も、その欲望を実現するための努力も、そこには変わらぬところにある。ただそれは、「人に気づかれ」ないところに移っているのだ。⁽¹⁾

一

若い勇者が、疑心暗鬼の王と対立し、幾多もの艱難辛苦を乗り越えて、ついには友情の尊さを証明してみせる悪戦苦闘の物語、というふうには単純に要約してしまってもいものかどうか――。

太宰治「走れメロス」(『新潮』一九四〇年五月)は、良かれ悪しかれプロットばかりに注目が集まり、そのためか、たとえば下記に示すような四字熟語(四字の漢字の列なり)のディテールに照準した研究が皆無である。

たとえば、「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。」という「走れメロス」の書き出しはよく知られているだろうが、ここに登場する「邪智暴虐」という四字熟語が、原典にある四字熟語なのか、それとも書き手の太宰治が付け加えた四字熟語なのかという問いに答えられる人は少なからう。また、

「邪智暴虐」という漢字を書ける人は多いし、「心がひねくれ、考えがよこしまであること」という語義を知る人も少なくないだろうが、「邪智暴虐」について、それ以上の蘊蓄を傾けられる人がどれだけのいるかと言われれば心もとない。

とはいえ、ここではそうした読者の無知を非難したのではないし、それを知っている読者を讃えようとしているわけでもない。ただ、太宰治という書き手は、私たちが予想する以上に「邪智暴虐」という四字熟語にこだわりを持っていたかもしれないということに注意を促しているだけである。

考えてみれば、「富嶽百景」や「人間失格」といったユニークな標題を創出することからして既に、四字熟語との親和性を垣間見せてくれるといつてよいのだろうが、そのような書き手が「邪智暴虐」という四字熟語にはたしてどれほどの注意を払っていたのかと問うのが、さしあたり本稿のテーマである。が、ひいてはそうしたトリヴィアルな問いが、やがて書き手の語選択の特性のようなものを明らかにし、さらには新たな研究方法のようなものを開示することになるのかもしれない。

二

太宰治という書き手の「邪智暴虐」という四字熟語へのある種のこだわりは、その類義語によって明らかになる。彼は「邪智暴虐」という四字熟語を別の四字熟語で言い換えているのだが、それが何であるか、分かるだろうか。

こう訊くと、中学校の定期試験レヴェルの設問ではないかとお叱りを受けそうだが、実はそうではない。それどころか、解答は非常に複雑であり、非常に繊細であると言わなければならない。この問いへの解答は、優に論文一本を要するのである。そして、それによってわれわれは、太宰治という書き手の芸の細かさに改めて感嘆させられることになるだろう。

まずこの問いが「走れメロス」一篇に限定されていないという引っかけに注意しておかなければならないのだが、しかし「走れメロス」というテキスト内に限ってみても解答は容易でない。もちろん一般的な解答は「奸佞邪智」ということになるだろう。中学校の定期試験ならば、それで正解である。

※教養学科(講師)

(平成二十一年三月三十一日受付)

だが、よく目を凝らして見たら「奸佞邪智」ではなく「奸佞邪智」こそが正解であるということに気づく。これは教科書や文庫本は言うに及ばず、全集ですら見落としてきた盲点である。初出誌『新潮』（二五七頁）も初刊行本『女の決闘』（河出書房一九四〇年六月 二〇一頁）も実は「奸佞邪智」なのである。それが『富嶽百景』（新潮社 一九四三年一月）に再録された際に、なぜか「奸佞邪智」に変わって以降誰も気づかぬまま今日まで来た。初出と初刊が「佞」の字で一致しており、かつ新潮社版『富嶽百景』の本文にあまり信頼性がないことから、誤植の可能性が排除できず、私などははっきり誤植だと考えている。その論拠の一つとして、当時から「佞」と「佞」の識別ミスが多かったことが挙げられる。

たとえば、太宰治『お伽草紙』（筑摩書房 一九四五年一〇月）には「ネイ」の字が三箇所出てくる。「佞」が二例、「佞」が一例である。まず「瘤取り」では、「鬼」の字に呼応するかのごとく「醜悪」というふうに「醜」の字が多用されていたはずなのに、二二頁へ来ると「佞悪」という二字熟語の形で「佞」の字も見えるのである。また「浦島さん」（目次は「浦島太郎」）でも八九頁に「佞奸邪智」という四字熟語の形で「佞」の字が出てくる。ところが、「舌切雀」になると、「佞悪醜穢」という四字熟語の形で「佞」の字に変わるのである。これはどうしたことか。

「佞」が二例で「佞」が一例だから、「佞」の方が書き手の意思を反映しているという考え方もあるだろうが、それは浅慮に過ぎるというものだろう。というのも、「瘤取り」については草稿が参照可能だからである。草稿によれば、印刷では「佞」であったにもかかわらず「佞」の字であることが判明するからである⁽²⁾。

太宰治『東京八景』（『東京八景』実業之日本社 一九四一年五月 二三頁）や同『右大臣實朝』（錦城出版社 一九四三年九月 一四〇頁）にある例もまた「佞」の字であることを踏まえるならば、誤植の疑いはいよいよ濃くならざるを得ない。そして青森県出身であった太宰治（本名・津島修治）にとつて、郷里の祭りの漢字表記が「佞武多」であったという事実も⁽³⁾、有力な裏づけとなるだろう。実際、太宰治『津輕』（一九四四年一月 小山書店 一〇八頁）にも「佞武多」とあるのである。ほとんどが「佞」の字という傾向が分かる。

上記の理由により、「走れメロス」の流布本にある「佞」の字は、「佞」の字の誤植であると私は考える。その結果、「走れメロス」一篇の解釈はもとより、教科書、辞書、全集等々の書き換えという事態にまで発展することになるだろうと思っている。少な

くとも「走れメロス」以前の「奸佞邪智」の用例が、はたして本当に「奸佞邪智」のまま有効なのかどうかといった再検証、語誌の書き換えが要請される。

さらに、誤植と考える内在的な論拠も挙げておくならば、「佞」の字が「妄想」の「妄」の字を内包しているという事実も外せないだろう。つまり「走れメロス」の最後の方に王のセリフとして「妄想」という語が出てくるのだが（信実とは、決して空虚な妄想では無かった）、私は「妄想」の「妄」の字と「奸佞」の「佞」の字とが響き合うというふうに解釈している。たしかに谷崎潤一郎のフェイティッシュな漢字へのこだわりが太宰治に常にあったというふうに全域化することには慎重でなければならぬ。が、「走れメロス」一篇に関するかぎりには、よく当てはまるであろうというのが、私一個の得た感触である。

翻つて、「奸佞」や「妄想」という熟語には、「女」という字も内包されている⁽⁴⁾。（ちなみに「奸」は、「姦」や「姦」とも書き得る。）「走れメロス」は、「女」の登場人物への目配りが利いているという点において先行テキストと差異化を図つた——つまり、先行テキストでは軽い扱ひだった「妹」を彫琢し、先行テキストには存在しない「少女」を登場させる——テキストである。ここでそのような事実を思い合わせるならば、「邪智暴虐」を「奸佞邪智」に言い換えたことには内的必然性があつたという結論にもなる。もちろん「邪智暴虐」のままでも、他のたとえば「卑猥醜」や「伶俐狡猾」などの四字熟語でも意味は変わらない。だが、それでは「妄」や「女」といった意味をこっそりミスファイケートするという遊び心が發揮できなかった。「語の下に潜む語」⁽⁵⁾ という問題まで視野に収めることが大切なのである。

「邪智暴虐」の言い換えは「奸佞邪智」によつて成されるのでなければならなかつたと推定する所以である。

二二

「走れメロス」一篇には多くの四字熟語が用いられている。

「邪智暴虐」「疲勞困憊」「新郎新婦」「奸佞邪智」「濁流滔々」「猛勢一挙」「木葉微塵」「獅子奮迅」「猛然一撃」「身体疲勞」「人間世界」「疲勞恢復」「義務遂行」など。

しかし、この中で典拠にある四字熟語はわずかに「猛然一撃」のみである。ここでいう典拠とは小栗孝則訳『新編シラー詩抄』（改造文庫 一九三七年七月）所収の「人

質「譚詩」を指しているのだが、「猛然一撃」以外はすべて太宰治という書き手による加筆——あるいは、別の知られざる先行テキストに依拠という方が厳密か——なのである。冒頭の「邪智暴虐の王」という「走れメロス」の大袈裟な表現は、「人質」では単に「暴君」とあるのみという一事からしても既に明らかだろうが、四字熟語は太宰治という書き手（編集者や演出家、化粧師に擬することができよう）にとつて必須の脚色アイテムであつたという仮説が急浮上してくる。この仮説は、他者の言説を自己化することに秀でた太宰治という書き手の手になる他のテキストを分析する際にも応用できる指標と言えよう。他者の言説に自家葉籠中の四字熟語の数々を迂り込ませることで自己化する。そのようなモデルを想定しておけば、典拠が確定していないテキストを分析する際にも、太宰なる書き手の地声とそうでない他者の声とをある程度、弁別することも可能になるのである。

ところが、以上を踏まえながら、「走れメロス」以外のテキストにまで分析範囲を拡張してみたとき、さらに驚くべき事実に行き当たつた。

ああ、この鼻のさきに突きつけられた、どうしようもないほど私に似ている残酷無道のポンチ画。

〔めくら草紙〕

決意したのである。この少年の傲慢無礼を、打擲してしまはうと決意した。さうと決意すれば、私もかなりに兇悪酷冷の男になり得るつもりであつた。私は馬鹿に似てゐるが、けれども、根からの低能でも無かつた筈である。自信が無いとは言つても、それはまた別な尺度から言つてゐる事で、何もこんな一面識も無い年少の者から、これ程までにみそくそに言はれる覚えは無いのである。

〔乞食學生〕

實情を知りながら送金したとなれば、兄たちは、後々世間の人から、私の共犯者のやうに思はれるだらう。それは、いやだ。私はあくまで狡智佞辯の弟になつて兄たちを欺いてゐなければならぬ、と盗賊の三分の理窟に似てゐたが、そんなふうは大真面目に考へてゐた。

〔東京八景〕

二、三の共に離れがたい親友の他には、誰も私を相手にしなかつた。私が世の中

から、どんなに見られてゐるのか、少しづつ私にも、わかつて来た。私は無智驕慢の無頼漢、または白痴、または下等狡獪の好色漢、にせ天才の詐欺師、ぜいたく三昧の暮しをして、金につまると狂言自殺をして田舎の親たちを、おどかす。

（下略）

〔東京八景〕

何を以てか我を注意人物となす、名誉毀損なり、そもそも老婆心の忠告とは古来、その心裡の卑猥醜なる者の最後に試みる牽制の武器にして、かの宇治川先陣、佐々木の囁きに徴してもその間の事情明々白々なり、いかにも汝は卑怯未練の老婆なり、（下略）

〔花吹雪〕

しかも世の誹謗は彼等父子にのみ集めさせておのれは涼しい善人の顔でもつばら一家の隆盛をはかり、その柔佞多智、相州にまさるとも劣らぬ大奸物、（下略）

〔右大臣實朝〕⁽⁶⁾

ギリシヤ神話に於いて、最も佞悪醜穢の魔物は、やはりあの萬蛇頭のメデウサであらう。眉間には狐疑の深い皺がぎざみ込まれ、小さい灰色の眼には浅ましい殺意が燃え、真蒼な頬は威嚇の怒りに震へて、黒ずんだ薄い唇は嫌悪と侮蔑にひきつたやうにゆがんでゐる。さうして長い頭髪の一本一本がごとく腹の赤い毒蛇である。

〔舌切雀』『お伽草紙〕

信じてやらなけりや可哀想だ。それにまた、この龜のこれまでの浦島に対する態度から判断しても、決してかのエデンの園の蛇の如く、佞奸邪智にして、恐ろしい破滅の誘惑を囁くやうな性質のものでは無いやうに思はれる。それどころか、所謂さつきの鯉の吹流しの、愛すべき多辯家に過ぎないのではないかと思はれる。つまり、何の悪気も無かつたのだ。私は、そのやうに解したい。

〔浦島さん』『お伽草紙〕

しかし、自分のやうに人間をおそれ「」

避け、ごまかしてゐるのは、れいの俗諺の

「さはらぬ神にたたりなし」とかいふ猿轡

「伶俐狡猾」の處生訓を遵奉してゐると、「」
 同じ形だ、といふ事になるのでせうか。ああ、「」
 (『人間失格』草稿)

これらの用例から分かることは、「邪智暴虐」／「奸佞邪智」という言い換えが「走れメロス」一篇という狭い範囲を超えて、太宰治全集という広域の中でも行われているということである。しかも驚くべきことに、その言い換えのヴァリエーションが非常に豊富なのである。このことは太宰治という書き手が「邪智暴虐」に類する四字熟語の系に強いこだわりを持っていて、それらを徹底的に自家薬籠中のものにしていったということを表しているだろう。そして、たとえ意味は同じであっても表現は微妙に変えるという規則のようなものに、書き手の自負のようなものを窺い知ることができらるだろう。

四

太宰治という書き手が「邪智暴虐」に類する四字熟語の系にここまで固執した理由は何なのだろうか。

葉藏は長い睫を伏せた。虚傲。懶惰。阿諛。狡猾。惡徳の巢。疲勞。忿怒。殺意。我利我利。脆弱。欺瞞。病毒。ごたごたと彼の胸をゆすぶつた。言つてしまはうかと思つた。わざとしよげかへつて呟いた。
 「ほんたうは、僕にも判らないのだよ。なにもかも原因のやうな氣がして。」

右は『人間失格』の一節であるが、太宰の熱心な読者であれば、直ちに「虚傲。懶惰。阿諛。狡猾。惡徳の巢。疲勞。忿怒。殺意。我利我利。脆弱。欺瞞。病毒。」という熟語の羅列に太宰の体臭のようなものを嗅ぎ当ててしまふだろう。実は「残虐無道」「厚顔無恥」「邪智暴虐」「奸佞邪智」「傲慢無礼」「兇惡酷冷」「狡智佞辯」「無智驕慢」「下等狡猾」「卑猥陋醜」「卑怯未練」「柔佞多智」「佞惡醜穢」「佞奸邪智」「伶俐狡猾」といった四字熟語の系にもこれと同じことが言える。あたかもパンドラの匣を開けてしまったかのように、人間心理のアイロニカルな暗黒面を表すこれらの語彙が太宰治という書き手の好みであったことは、衆目の一致するところだろう⁽⁸⁾。さらに見方を

変えれば、こうした語彙を意図的に自己のテキスト(前期・中期・後期)に遍く散りばめ反復させること(conduplicatio)によって、太宰治という書き手は自己の像を讀者に幻視させたというふうな技術的、戦略的な理解も可能になるかもしれない。

「邪智暴虐」系の四字熟語に固執したもう一つの理由として考えられるのは、意味を変えることなく表現の微妙な綾を巧みに言い換えてみせるという、いわば言葉遊びそのものに惹かれていたという可能性も否定できない。四字熟語の持つこうした機微と魅力については、「平談俗語」／「俗談平話」の差異を取りあげた高橋英夫の言が参考になる。

前半と後半が入れ替わっているほか、違う字が一つ使われているが、意味はほぼ同じらしく、日常会話のありふれた言葉をさす。以前から「平談俗語」のほうが目と耳になじんでいたけれど、ある時「俗談平話」は芭蕉にかかわりがあるようにだと気がついた。(中略)もう一つ分かったのは「俗談平話」は俳諧研究の分野だけに残り、一般には「平談俗語」と習わされるようになったこと。「日本国語大辞典」は「平談俗語」の文例に島崎藤村「千曲川のスケッチ」、唐木順三「道元」を挙げている。「平談俗語」の形なら坪内逍遙「小説神髓」にも。私の遊び心はこんな逸脱に時間を費やした。⁽⁹⁾

これを踏まえると、太宰治という書き手もまた、こうした四字熟語の機微に魅了された一人であったかもしれないと考えられる。

文体論の第一人者である中村明によれば、「短編に同じことばが繰り返り現れるのは興醒めだと言う永井龍男のような作家もいれば、武者小路実篤のように同じことばが何度出ようが一向に驚かない天衣無縫の文章も中にはある。太宰はむしろ積極的に同語を繰り返すタイプだ。」という⁽¹⁰⁾。しかし、厳密に言えば、一方では「簡単なのだ、(逆行)などのように、同じ言葉連続して繰り返すタイプではあるものの、他方では同じ四字熟語は他作であっても絶対に繰り返さないといった側面があることも付け加えておかなければなるまい。

円満字二郎は、「小説の中の四字熟語を語ろうとして、太宰治の名を落とすことではできない。」と言った上で、

「といつても、太宰が常に四字熟語を多用する作家だ、というわけではない。実際のところ、たとえば、戦後の代表作の一つ『斜陽』では、彼はほとんど四字熟語を使っていない。この小説は、彼が得意とした女性による独白体という形式をとっているが、同じ形式をとる『女生徒』や『きりぎりす』といった作品でも、太宰は四字熟語をあまり使わない。」¹¹

と指摘するが、厳密には「女生徒」が有明淑の日記を下敷きにし、『斜陽』が太田静子の日記を下敷きに行っていることを踏査した上での結論でなければ意味がないだろう。それに太宰治が四字熟語を多用するかどうかということはそれほど問題でないとも言える。というのは、太宰治の作品に出てくる言葉は、即、太宰治自身の言葉ではないというテーゼを噛みしめなければならぬからだ。

太宰治という書き手にとつての四字熟語は、書き手が他者の言説を自己化するとき発動することが多い。とするならば、太宰治は四字熟語を多用しなかったとも言えるし、太宰自身は常に四字熟語を多用する書き手であったと言っても差し支えないことになる。それよりは、四字熟語を抑圧している箇所があるとき、それは無調整の牛乳のように、自己の言説を抑圧し、他者の言説をそのまま生かしているという風に理解する方がより真実に近いだろうし、自然であると考ええる。つまり、女語りのような他者の言説を中心に据えた場面では、四字熟語を多用する道化の太宰治という男が消滅するというのが、これまでの考察を踏まえた現時点での私の考えである。

作品の内部は作者のたった一つの声だけで満たされているという前提は、ややもすると解釈を狭く、そして平板なものにしてしまう恐れがあり危険である。

五

思うに四字熟語は、他者の言説に自己の言説を切り結ぶ装置＝楔であると同時に、細かすぎたり潜在したりして見逃しがちな無意識の襞をさまざまに可視化してくれる探照灯のようなものである。また四字熟語は、自己のテキストや言説間の相互性（ジャン・リカルドゥの言葉で言えば「制限的な間テクスト性」*intertextualité restreinte*）¹²、一見無関係に見える文脈や場面を結わえ、思いも寄らぬ新たな発見を開いてくれる窓＝媒介でもあるだろう¹³。

たとえば、メロスという主人公から一方的に「邪智暴虐」や「奸佞邪智」というレッテルを貼られてしまうディオニス王という人物造形を考察する上では、同じように形容される他の人物造形を参照するという手がある。たとえば「兇悪醜穢」という四字熟語によって形容される「舌切雀」（『お伽草紙』）における「メデウサ」。「眉間には狐疑の深い皺がぎざみ込まれ」というところがディオニス王の描写と酷似している。これはさらに「古典風」の「かつて叡智に輝やける眉間には、短剣で切り込まれたやうな無慙に深い立皺がぎざまれ、細く小さい二つの眼には狐疑の焰が青く燃え」というカリギュラ王の描写をも招き寄せる。四字熟語は、単独の作品という枠にこだわって決して見えてこない、太宰治という書き手が手の内に握る一つのパターンのようなものを明るみに出してくれるだろう。

また、「奸佞邪智」と最も酷似する「佞奸邪智」という四字熟語によって形容される「浦島さん」（『お伽草紙』）に出てくる「エデンの園の蛇」が「恐ろしい破壊の誘惑を囁くやうな性質」を帯びていることを押さえておけば、メロスが故郷への未練を振り払う際に「邪智暴虐」でなく「奸佞邪智」と言い換えたことの意味が明瞭になるだろう。

さらに、「傲慢無礼」「兇悪酷冷」という四字熟語に導かれれば、メロスに焦点化された「走れメロス」の語りを相対化することが可能となるかもしれない。「乞食學生」中の「決意したのである。この少年の傲慢無礼を、打擲してしまはうと決意した。さうと決意すれば、私もかなりに兇悪酷冷の男になり得るつもりであった。」という記述は、「走れメロス」のディオニス王の「邪智暴虐」が実は「傲慢無礼」なメロスの態度によって引き出された一時的な態度であった可能性を示唆してくれる。「何もこんな一面識も無い年少の者から、これ程までにみそくそに言はれる覚えは無いのである。」という「乞食學生」の記述は、そのままディオニス王の心の眩きと間テクスト的に結ばれる。

「乞食學生」という四字標題のテキストには、さらに次のような場面もある。

私とて、恥を知る男子である。ままになる事なら、その下手くその作品を破り捨て、飄然どこか山の中にも雲隠れしたいものだ、と思ふのである。けれども、小心卑屈の私には、それが出来ない。けふ、この作品を雑誌社に送らなければ、私は編輯者に嘘をついたことになる。私は、けふまでには必ずお送り致します、

といやに明確にお約束してしまつてゐるのである。編輯者は、私のこんな下手な作品に対しても、わざわざベエジを空けて置いて、今か今かと、その到来を待つてくれてゐるのである。私はそれを知つてゐるので、いかに愚劣な作品と雖も、みだりにそれを破棄することが出来ない。義務の遂行と言へば、聞えもしいが、さうではない。小心非力の私は、ただ唯、編輯者の腕力を恐れてゐるのである。

(下略)

ここで第一に指摘できることは「小心卑屈」という「邪智暴虐」に類する四字熟語の使用であり、第二には、その四字熟語が「小心非力」と言い換えられるという先に見た現象がここでも見られるということだが、何より指摘しなければならないことは「走れメロス」と原型的に酷似している点であるだろう。それは「走れメロス」の「義務遂行」という四字と「乞食學生」の「義務の遂行」という語の一致を言うに止まらず、構図、話型が非常によく似通つてゐるのである。試みに「私」を「メロス」に、「編輯者」を「セリヌンティウス」に置き換えてみれば、事態が直ちに飲み込めるだろう。「メロス」が美化され、「私」は卑下されているという正負の違いを除けば、「走れメロス」と同型であるということが分かる。

この問題については別稿を用意するため、ここで詳述することはしないが、同じ一九四〇年に発表された「走れメロス」(五月)と「乞食學生」(『若草』七月〜二月)には、他にも通底する要素・問題が非常に多い。「乞食學生」を座右に置いて「走れメロス」を読む。あるいはその逆によって、また新たな解釈が生まれるものと期待される。

上記はしかも一例に過ぎない。他のテキストによつても「走れメロス」の解釈をより豊かにし、他のテキストの解釈を触発することが起こり得るだろう。

いずれにせよ、太宰治の四字熟語が、新たな間テキストの関係を探知することを助けてくれるという確かな手応えが得られた。四字熟語に導かれることによつて、作品という枠を超え、太宰のエクリチュール全体を反射的に参照しながら横断すること。このアイデアはとりわけ他者の言説とどう切り結ぶかをテーマとする太宰文学に有効だと考えるが、しかし太宰治研究に限定せず汎用化することも可能だろう。そうすれば、手堅い注釈研究と恣意的な解釈学との懸隔を埋める新たな方法として脚光を浴びることになるかもしれない。

「走れメロス」の「邪智暴虐」という四字熟語から出発したはずの議論は、いつのまにか思いもかけない漂流を余儀なくされたように映る。しかし、それは一見単純に見えるながら、実は意外な奥行きを持つてゐる。「走れメロス」というエクリチュールの特質に新たな視角から鋭くメスを入れた結果である。そしてそれは「走れメロス」以外にも言えることなのであるということ強調しておきたい。

六

今日もつとも手軽に漢文脈を自らのエクリチュールに引き込んでくれる四字熟語であるが、教科書や辞典というものはおしなべて大本の出典と語義ばかりを偏重して、ややもすると近代の用例を軽視してきたように思う。むしろん故事来歴や語義に関する正確な知識が欠かせないことは言うまでもないが、四字熟語が過去の遺物ではなく今なお現役の言葉であることに重きを置き、起源中心の研究・教育から、運用・文脈中心のそれへとパラダイムを移行^{シフト}していくことも考えていい。

図らずも、齋藤希史が、言文一致体を起点とする日本の近代文学史のスタティックな通説に反し、「日本の近代にとつて漢文脈とは何であつたかをまず見定めることが必要ではないか」⁽¹⁵⁾との重要な問いを提起しているときである。また、円満字二郎が、日本近代小説における四字熟語の具体的な分析に着手しており、研究の萌芽は芽吹き始めている⁽¹⁶⁾。ここら辺りで『太宰治四字熟語辞典』(仮題)のようなものを構想してみてもよいかもしれない。

水村美苗『日本語が亡びるとき』が、日本語リテラシーの低下と、リング・フランカ(世界共通語)としての英語の台頭という二重の危機意識の下、近代文学の終わりと豊かさとの鮮やかに同時照射してみせて、論壇に少なからぬ衝撃を与えたが⁽¹⁶⁾、若い世代が四字熟語を使いこなせなくなる日もおそらくそう遠くはないだろう。今回のような拙い四字熟語の用例研究でも、豊かな近代文学を再賦活する手だての一つとなつてくれればと希うものである。

注

- (1) 田中和生「太宰治の現代性―「他者」に触れる言葉」(『国文学』二〇〇八年三月)
 青森県立図書館・青森県近代文学館編『資料集 第二輯 太宰治・原稿『お伽草紙』と書簡』(青森県近代文学館 二〇〇三年一〇月 一七頁)
- (2) 新潮社編『新潮日本語漢字辞典』(新潮社 二〇〇七年九月) 参照。
- (3) 萩原朔太郎「常識家の非常識」(『不同調』一九二八年三月、『萩原朔太郎全集第八卷』筑摩書房 一九七六年七月 六一―四頁)にある「女らしい邪智の悪意」という用例が参考になる。「女らしい」という形容はおそらく「奸佞」／「佞奸」の熟語からの連想より導かれたものと思われる。
- (4) ジャン・スタロバンスキー『ソシユールのアナグラム 語の下に潜む語』(金澤忠信訳 水声社 二〇〇六年三月) 参照。
- (5) 太宰治『石大臣賞朝』(錦城出版社 一九四三年九月)の一四〇頁。なお、この一四〇頁には「兩奸蟠踞」「兩奸」「柔佞多智」「大奸物」「幕府の奸」というように「奸」や「佞」の字が頻出しており、本稿の関心からして非常に興味深い一頁となっている。
- (6) 太宰治『直筆で読む「人間失格」』(集英社新書ヴィジュアル版 二〇〇八年一月 二八〇―二八一頁) 参照のこと。なおここでは便宜上、「」により加筆を、||により削除を示した。
- (7) 藤原耕作「戦時下の太宰治文学―「佳日」を中心に」(『国文学』二〇〇八年三月)は「(内面／外面)・(栄え／滅び)・(中央／周縁)・(強／弱)・(健康／不健康)・(生／死)などの、一般的には前者に価値があると思われる傾向のある二項対立において、あえて後者の役割を引き受けようとし、場合によっては後者にこそ可能性を見出そうとする姿勢をとること」を「太宰的イロニー」と呼んでいる。
- (8) 高橋英夫「風鈴が鳴る」(『日本経済新聞』二〇〇八年八月一七日朝刊)
- (9) 中村明「日本語の文体 文芸作品の表現をめぐって」(岩波書店 一九九三年九月 二九五頁)
- (10) 円満字二郎「心にしみる四字熟語」(光文社新書 二〇〇七年 三七頁)
- (11) 円満字二郎「心にしみる四字熟語」(夏目書房 二〇〇〇年五月 四二―四三頁) 参照
- (12) 土田知則「問テクスト性の戦略」(夏目書房 二〇〇〇年五月 四二―四三頁) 参照
- (13) テッド・ネルソン「インタラクティブ・システムとパーチャリティ設計―未来の芸術であるインタラクティブ・システムの設計は、新たな哲学的原理にもとづく」(西垣通編著訳『思想としてのパソコン』NTT出版 一九九七年五月 二二〇頁)のイメージも参照。
- (14) 齋藤希史「漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界」(日本放送協会 二〇〇七年二月 二二―四頁)
- (15) 円満字二郎「心にしみる四字熟語」(光文社新書 二〇〇七年)
- (16) 水村美苗『日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』(筑摩書房 二〇〇八年一〇月)

付記

本稿は、以下に示す一連の「走れメロス」研究を踏まえている。拙稿「走れメロス」の〈話型学〉―典拠・教科書・解釈―(前)、『日本近代文学会北海道支部会報』第四号 二〇〇一年七月、同「走れメロス」の〈話型学〉―典拠・教科書・解釈―(後)、『日本近代文学会北海道支部会報』第五号 二〇〇二年五月、同「走れメロス」評釈(一)、『山内祥史編』『太宰治研究15』和泉書院 二〇〇七年六月、同「走れメロス」評釈(二)、『山内祥史編』『太宰治研究16』和泉書院 二〇〇八年六月、同「走れメロス」評釈(三)、『山内祥史編』『太宰治研究17』和泉書院 二〇〇九年六月。煩雑になることを恐れ、如上いちいち注に挙げることをしなかつたが、併読して戴ければ幸いである。

太宰治の本文の引用については、出典を明示したものを除き、私に校訂した本文を使用した。論の性質上、厳密さが要求されるため、旧字・旧仮名も使用した。